

福祉系対人援助職養成の現場から

60

西川 友理

保育実習の山場、設定保育。

保育士実習には、訪問指導があります。これは、学生の実習期間中に、養成校の教員が学生の実習先に訪問し、学びがスムーズに進んでいるか、実習先の先生方からどのように指導いただいているのか、最後まで実習が出来そうか等、学生にスーパーバイズするとともに、実習先の職員の方と話し合い、指導のすり合わせを行うことを指します。

この際、タイミングが合えば、設定保育を見学させていただくことがあります。設定保育とは、40分や60分という一定の時間、実習生がそのクラスの保育を任せ、子ども達と何らかの時間を過ごすことです。

小学生や中学生の時に、教育実習生が講義を担当していた日があったと思うのですが、あれの保育所バージョンだと考えていただくとちょうど当てはまるかと思います。

学生は来たるべき設定保育の時に向けて、指導案を書きます。指導案とは、自

分が担当する保育の進行について書いたものです。何分から何分までの間にどのようなことをして、そのためにはどこにどういう座り方をして、何をいくつ用意しておいて、どのようなことを声掛けするのか等、その保育の進行に関わるありとあらゆるものを細かく書いた計画書です。設定保育の数日前から、担任の先生にチェックしていただき、指導を受け、何度か推敲をしたのちに、本番の日を迎えます。

Aさんの設定保育

というわけで、Aさんにとって、初めての設定保育がスタートしました。

「さー、じゃあ今からみんなで面白いことするよー！」

と、まずは手遊び、それから絵本、色々と用意してきたゲームを行います。

おや、ゲームの段取りがなかなか複雑です。

「はい、クマさんチーム、ここに並んで、パンダさんチームはここね、あ、みっちゃんそっちはパンダさんチームだよ、みっ

ちゃんのリスさんチームはこっちよ！」
「リクくん、今何する時間だっけ？こうじゃないよね？」

「あー！けいちゃんだめだよー、そんなことしたら楽しいこと出来ないのにー！」
なかなか悪戦苦闘しています。

途中、担任の先生のさりげないサポートも入り、なんとか 50 分間の設定保育を終えました。

設定保育後、担任の先生は学生と少し話をする時間をとってくださいました。学生に近づき、様子を伺うと、

「うまくいかなかったです……」といって肩を落としている学生がいました。

「何がうまくいかなかった？」

「うーん、全然指導案どおりにいかなかった…。指導案のとおり出来たら、もうちょっとうまくやれてたと思うんです。でも、子どもの動きが予想外すぎて…。」

「ああ、確かに、何か自分の段取りで必死になってるようでしたねぇ。」

「ほんまに、それです。必死でした。」

「初めての設定保育やから、きちっと段取りどおりしないと！って思ってたのかなぁ……でも、指導案どおりに行かないのは失敗じゃないんですよ。Aさん、設定保育中、指導案チラチラ見てたよね。」

「はい、それこそ段取り忘れたらいけないと思って。」

「うん、だけど、子どもの動きや表情を、もっと見なきゃいけなかったかもしれない。もっと言うとさ、子どもを自分の意

図に沿わせようとしすぎてなかったかなぁ。」
「あー……それは、あるかも。」

…などと、偉そうに言う私ですが。

そんなことを言う私も、15 年程前は、時々こんなことをしてしまっていました。

学期末が近づいてくると、ちょっと焦ることがあります。

「あと数回の講義でこの科目は終了、でも、ホントはもうちょっと時間が欲しい。せめてあと 1 回、講義回数が余分にあれば助かるのに……！」

福祉系対人援助職の資格に関わる科目については、教授内容が国から指定されているのです。養成校として講義を担当し、卒業時に保育士などの国家資格や、社会福祉士などの国家資格試験受験資格を付与するカリキュラムに携わる人間としては、最低限教えなきゃいけないことは教えなければいけない、というプレッシャーがあります。そんな時には、準備ばっちり、スライドたっぷり、がっつりしっかり講義構成をし、チャイムが鳴って出欠をとったらすぐに、

「さあ！今日はどうしても第 11 章まで終わらせちゃいますね、爆速でいくよ！」と宣言、気合フルスロットルで講義をスタート！

テストも近いし、教員の勢いも激しいし、スピードも速いし、その中でメモしなきゃいけないこともあるし、と、わたししながらついてくる学生。言わなきゃ

いけないことを言わねばと焦る私と、メモ取りマシンのようになる学生。と、その中で「あ、もう今日は無理！」と判断したのか、プツッと糸が切れたように寝てしまう学生もちらほら。そうこうしてるうちに1時間半の講義時間は終わり、何とか予定通りの内容を伝えました。

すると…そんな日の講義は、どうなるか。概ね、普段よりも、学生の満足度が低かったのです。

それは単に講義内容が早くてついていけない、という事も大きい要因ですが、それよりも学生個々が、私に、「面白い」という顔を見せる時間が少ないということからわかりました。講義後のミニッツペーパー（その日の講義を受けた雑感を書くもの）にもいきいきしさがありませんでした。

勢いで走り抜けて、私も学生もノルマをこなしただけ。いや、学生の中には寝こけてしまって、講義内容が入っていない学生もいます。こんな講義、意味あるんかいな…と思った私は、次第にこういう講義の仕方をとらないで済む方法を考えるようになりました。

内田樹さんの 初めてのフランス文化論の講義

先日、内田樹さんと西靖さんのポッドキャスト「縁側ラジオ」で釈徹宗さんがゲストの回がありました¹⁾。

全員が大学の教壇経験者ということで、講義について話されており、大先生達に

対しておこがましくも「うわー、やっぱりそうなんだ！そうですよね～！！」と強く共感してしまいました。

いわく、内田樹さんは、初めてフランス文化論の講義を大学で受け持った時に、半年かけて電話帳のような講義ノートを用意して挑んだ、とのこと。ところがいざその講義を始めると、どうもぱたぱた学生が寝ていく。ありゃ、これは、どうしたらいいのかしら、と何年か考えていた。

そんなある朝の通勤時、大学の最寄り駅にヤクザがいた。うわっ！と思ってその話を誰かにしたいと思ったけれど、早朝だったため、通勤中はもちろん、キャンパス内でもなかなか知り合いに会わない。あ～この話したいしたい、と思って、1時間目の講義の冒頭に、学生に思わず、「さっきね、西宮北口の駅にヤクザがいたんだよね。」

というと、ざっと全員がこちらを見た、とのこと。

「その時に分かったのが、用意してきた話をするから寝ちゃうんだ、ライブでやるといいんだ、ということ。話があっちに行ったりこっちに行ったり、絶句したりすると、学生は寝ない。むしろ立て板に水のように、用意してきたものをズラズラ喋っていると寝てしまう。なぜか」と学生は『自分たちが目の前にいてもいなくても同じ話をするんでしょ』と感じて、自分の実存の根拠を崩されてしまうから。つまり、今この場でしか通

しない、この場だから出てきた話題を、君たちに向かって話しているんだよ、お願いだから聞いて、というところもちを向けると皆が起きる。それから、何も準備せず、思いついた言葉の中に、どう学術的コンテンツを持ってくるか、というスタイルを、20年くらいかけて苦労して作ってきた。」
とのことでした。

私はさすがに何も準備せずに学生の前に立つというところまでは、養成カリキュラム科目担当としては出来ませんが、(そしてそこまでの能力も度胸もありませんが)、今この場所だから出てきた話をほかならぬあなたに向かって話をする、という感覚はとても分かります。

毎年同じ科目を担当していたとしても、その年の、その時の、その日の社会情勢や時事の影響を絶対に受けないはずはありません。というよりも、その日の天気や気温ひとつで学生の雰囲気は変わります。なにより今年の学生は去年の学生と違います。相手が違うのに、前年と全く同じ内容で話して、通じるわけがないという感覚はあります。それは例えば 50 年前の出来事の解説といった 1~2 年で変わらない内容であったとしても、去年の説明と今年の説明では、表現やニュアンスが違ってきます。

講義の真っ最中、どうしても教員側が話している量が多くはなりますが、学生は目線や顔つきや表情でとてつもなく反応してきます。それがまた、こちらの話す

内容に…ちょっとおおげさな言い方をすると、脳みその回線の繋がりに…影響して、時には、こんな話するはずじゃなかったのにな、という話までしてしまいます。

「待って、違うな、ええと、今気づいたけど、これ、こういうことじゃないかなあ、どう思う？」

と、その場で突然新しいことに気付いてしまうこともあります。それはもう、歌手や芸人さんがライブで「今日のお客さんはノリがいい」「今日のお客さんは優しかった」「今日はアウェイだったけどウケた」とおっしゃっている事とおそらく同じであると感じています。

教員側が「他でもないあなたに対して、この場で生まれた話をしようと思っているんです」というところもちではなしをすると、学生はそれに反応します。これに呼応して、教員の授業も展開が広がります。

一方的な講義ですらそうですから、対話や議論を取り入れた講義はもう、全然知らないところに学生達が連れて行ってくれます。教員は多少学生よりも情報や知識を持っているだけで、学生一人一人の経験はまったくもって豊かです。その豊かさを皆で出し合いながら、考えを深めていきます。

私が講義で気を付けていること

今私は講義の初めに、出来るだけ、その日その時の学生の顔色や雰囲気を感じ

る時間をとっています。プリントを配布したり、パワーポイントの準備をしつつ、皆がどんな顔をしているのか、どんな雰囲気か、30 秒～1 分程度、皆をよく感じようとしています。

時には、その様子を見て全体に話しかけます。

「うーん今日なんか落ち着かないねえ、いいことあった？ひとつ前の講義何でしたか？あ、体育？盛り上がったの？そおかあ、なるほどねえ…」

「寒いですねー、皆寒い中 1 時間目から頑張って講義に来たんですねえ。」

「なんか皆さん、眠そうですねえ、雨の日って眠くなるよねえ。」

「……………（小テスト前で皆手元のノートに集中しているので、声をかけずにとりあえずニコニコ）」

今まで言語化できませんでしたが、先ほどのラジオの内容を踏まえると、この一連の行動は、

「今からあなたと話をするからね、あなたに伝えようと思っているよ」

という確認のような、お互いのチューニングのようなものになるのだらうと思います。

ただ、このような関わり方をしても、寝てしまう学生、こそこそとお喋りする学生はいます。それはもう、昨夜寝てないとか、体調が悪いとか、その学生にとって講義内容よりも大事な何かがあった(が)、資格に関わる講義だから仕方なく出席し

ている)といった事情があるか、そうでなければ教員側に何らかのメッセージがあるのだと考えられます。

それはもう講義云々ではなく、他のアプローチが必要な人たちです。

この場でしか通じない、 あなたとの話

しかもこれは、何も学生に限った話ではないように思います。相手が社会人であっても、幼児であっても、目の前の人が今どう感じているのかを確認し、「そんなあなたに、今からお話したいなぁと思っているんですよ」というアプローチをかけると、それを無視されることはまずありません。声や言葉や態度や表情で何らかの返答があります。

時々、状況によっては「聴きたくない!」「応じたくない!」という発言や、対応や、反応が出ることはありますが、これは逆に明確なメッセージですし、それこそこの場でしか通じないやり取りにつながるものだと思います。

この場でしか出来ない、 あなたとの設定保育。

そしてこれは、設定保育にも当てはまると感じています。

一生懸命練ってきた指導案をいざ実践に移すとなると、どうしても指導案に書いたプロセスをしっかりと全うしたくなる事には強く共感します。でも、指導案通

りにするよりも大切なのは、今日の前にいる子ども達の様子をしっかりと確認し、感じることです。その上で、「そんな皆さんと、今からこういうことをして楽しみたいと思っているんですよね」とアプローチすることで、お互いに「わたしとあなた」という実存を感じられる場が作られる。そういった場でこそ、保育が展開されていくのだと思います。

子どもは指導案の中ではなく、目の前に実態として居るのです。

思い通りにいかなくたって

この連載の第46号に、以下のような保育系養成校の卒業生を紹介しました。…指導案の計画通り、思い通りの流れにならない保育に対して、どうしたらいいか。そう考える後輩の学生に対して、その卒業生（保育士）はいいました。

「思い通りにいかない、なんて当たり前じゃないですか！ そんな時は、思ったよりずっとよくなったらいいだけやん、って思うんです。だから、子どもの思いに寄り添って、子どもに任せてしまいます。子どもが夢中になって、自分のやりたいことをしている時って、本当に生き生きしてて、凄いんですよ！」

まさに、子どもをよく見て、子どもとともにその場にいることを選び、「わたしとあなた」の関係の中で、保育を展開していく人でした。

では、保育の指導案の

意味って何だろう

とはいえ、指導案どおりでなくても、目の前の子どもを感じて、それに応じて…という保育が大切だからといって、指導案に意味がないわけではありません、むしろ指導案をしっかり書いてあるから、思い通りでない展開になったとしても、「そもそも私は、何のために、何を大事にしたいと思ってこの保育をしていたのだったかな」「何を達成したいと思っていたんだっけ」というところに立ち戻り、対応出来るようになります。

実は指導案には、冒頭に「今の子どもの姿」を書く欄があります。これは、今の子ども達の発達状況や子ども達の行動、流行っている遊びなど、その時期の日常の様子を記入する項目です。この内容に基づいて、どんな設定保育にするかを考えます。指導案のフォーマットは園や養成校によって様々ですが、「今の子どもの姿」を書く欄のない指導案は見たことがありません。

つまり、そもそもの指導案が、まず今の子どもの姿はどんな様子かを見ることから始めるようになっているのです。それを実行に移す際にはなおさら“今、ここ”の子どもの姿をしっかりと見る事が大切です。

その時、その場に生まれるもの

保育も、講義も、関係性の中で、その

場で紡ぎだされていきます。

対人援助職養成教育は国から決められた、「こうすべき」「こうせねば」「最低限ここはクリアしておくこと」という、カリキュラムの中で行われています。だからこそ「その時、その場に生まれるもの」は無視されがちです。

しかし、その時、その場、“今、ここ”に対応することが多い福祉系対人援助職にとって、本当に大切なものは何でしょうか。養成校教員は、どんな姿を伝えることができるでしょうか。

まずは教員が、“今、ここ”に開かれた自分であること、相手が大人でも子どもでも学生でも繋がる相手を見ることが、繋がり、感じようとする事、その姿勢を見せる事が大切だと思うのです。

**ところで、2025年2月現在、
私は松葉杖生活をしています。**

実は今年1月末に足を負傷し、1か月ほど松葉杖生活と診断されてしまいました。その3日後に家から2時間ほど離れた場所で、社会人を対象とした講座を担当していました。一瞬、困ったな、と思いましたが、しかし、こんな時だからこそできる授業をしようじゃないか、と考えました。

机を動かす、プリントを配る、皆の意見を聞きながら、教室内を歩き回る…いつもの私スタイルの授業が出来ないとい

う状況。いまこそ、皆さんに沢山お願いする時です。

「これ、配っていただけますか。」

「話し終わったら、誰かにマイクを回してください。」

「（一番後ろの席の人に）おーい、もーちょっと大きい声で話してくださいーい！」

「自分たちで机を動かして、5人チームでワークしてくださいねー。」

やがて休憩時間等でも、受講生さんが「椅子、ここにおいておきましょうか。」

「黒板消しましょうか。」

「何かできることないですか？」

と聞いてこられます。

私も受講生さんを感じようとし、受講生さんも私を感じようとする。それは講義内容に大きく影響します。まるでグルーヴィーなライブのように、すてきな講義になりました。

松葉杖で講義、こんな機会はそうそう得られるものではありません。まさに「他にもないあなたに対して、この場で生まれた話をしようと思ってるんです」という状況になりました。

私達、関係性の中で生活しているんだねえ、と、改めて感じた一日でした。

・・・・・・・・・・・・・・・・

1)「#31 縁側に初ゲスト。『ここだけの話』はとっても大事、という話で盛り上がり、、、」『内田樹 西靖の縁側ラジオ』2025年2月7日MBSラジオ ポッドキャスト